

50歳に新しい人生をチャレンジする勇気ある？

～ニセコに移住した沼尻賢治さん～

北海道大学文学院
博士後期課程
張 力丹



沼尻さんの家の正面

水色の外装で、明るい感じを与えてくる沼尻さん（60歳・神奈川県出身）の家。正面に羊蹄山、左側にアンヌプリに囲まれ、広大な原野を眺める一戸建て。それは「ザ・マッドハッター・ニセコ」という帽子屋でもある。

移住してから10年目を迎えた沼尻さん。移住した最大の動機は、スキーを一生懸命にやりたいこと。しかし、今はスキーから足が遠退いて、毎朝玄関の除雪をしながら「今日の雪が良いなあ」とアンヌプリのスキー場を見上げる。



沼尻さんと「スパークー」家族との写真

50歳までの人生

今帽子職人と名乗る沼尻さんは、20歳に文化服装学院を卒業して洋服屋さんに就職。当時の日本は、チャンスが溢れる、ものを作れば売れる、嘘みたいなバブル時代だった。朝6時起きて、7時家を出て、2時間を走って9時に王子の倉庫に着いて仕事を始め、夜12時まで働いていた。深夜1時2時ぐらい家に帰り、また6時起きて、昨日の生活を繰り返した。苦労していたが、「仕事を達成したいし、成立させたいという気持ちも強かった」と語った。

洋服屋で10年間働いて、偶然なことで編集者になった。50歳になるまでの5年間は、個人の好みで立てた企画書はすべて許可され、自由に世界各地へ取材ができる、まるでこれからの25年間の苦労へのご褒美のように幸せな時間を過ごした。これまで積み重ねてきたすべてを捨てて、雪以外に何も考えていなかった沼尻さんは、2012年、東京から夫婦でニセコに引越した。

ニセコに移住した理由として、スキーに対する熱意に決まっているが、仕事をやめるように決意したのは、3.11地震が原因の一つ。当時東京にいる沼尻さんは、世の中が一瞬にしてこんなふうになってしまうか、とテレビを見ながら心が震えた。「今日あることが明日あるなんて、何も保証はないわけですね」と意識した沼尻さんは、こうやって何も無いという生活の中、能動的に、主体的に変化を求めた。

仕事を辞めてみた、ニセコに移住してみた、所得を十分の一にしてみた、帽子屋をやってみた：やってみたシリーズ。

「所得は十分の一になっても死なないですから、人は。」と笑いながら語った。

40歳を過ぎてからスキーを始めた。

その知らない世界をもっと知りたい、雪のそばに住みたいということへの熱望に駆られ、ウィンタースポーツリゾートとして世界中で有名になっているニセコに移住することを決定。都市生活を断ち切り、知らない土地でさきの知らない人生に踏み切った。

東京時代では、冬の短い間に10日間も滑れなかったが、移住して最初のシーズンには100日間も滑った。「10年分ぐらい取り戻したんですね」と沼尻さんは笑いながら語った。



沼尻さんの家から眺める羊蹄山

沼尻さんは、日本の経済が一番高度成長時代に育ってきている。それは外で息をすると胸が痛くなるほど光化学スモッグのような公害、水俣病みたいな公害病が発生している環境汚染のひどい時代だった。自然が豊かで空気がキレイのニセコに移住している沼尻さんは、自然に恵まれた環境に心豊かで充実した日々を送りながら、今後とも変わりがなく今のままであり得るように守りたい気持ちも高まっている。東京時代と種類の違う幸せをもたらす源を失うことは欲しくない。

ニセコでの生活

沼尻さんは、長い間趣味で生計を立てることにしない決めていた。だがニセコで帽子づくりを仕事にした理由は、「好きなことをやりたい。なんでそれはできるのって言われても、好きだから。」とのこと。

「何かになるということはずごく大切で、僕は帽子屋になりたいから帽子屋なんだけど、ただ帽子屋だから何かしちやいけないこともないし、なんでもすればいいと思います」というのは、沼尻さんがニセコに来てからわかったことだ。帽子職人を名乗る沼尻さんは、取材や編集の依頼が来ればそれをやる、本を書く頼みがあつたら原稿を書く、というように得意なものをすべてやっている。

ニセコでの生活に対してある程度覚悟していたが、移住した最初、帽子屋が始めたてで注文もないし、仕事もないし、お金も入ってこないし、ちよつと焦った時期があつた。でも、おかげさまで帽子屋がうまく営まれるようになった。最初自信がなかった沼尻さんは、やればやるほど帽子づくりがうまくなり、お客さまと繰り返してやっていく中で徐々に自信がつくようになった。



沼尻さんの手作り帽子

「スキーを中心の生活をしようと思つて、ニセコに来たら知らない間に犬が中心の生活になつちやつた」と、沼尻さんは笑いながら語つた。「スキー」を飼いだめたことで、滑走日数は1日間に急降下。スキーを中心にしていく生活が犬を中心に切り替わつたのだ。

帽子屋として何が一番楽しいといえば、帽子を作ることだ。これまでは、ニセコの環境になれたり、帽子屋という仕事をどうしたら広げたりする10年だった。帽子屋を事業にしたいくない沼尻さんは、これから何か新しくチャレンジしたいというビジョンはなく、今のことを「ちゃんと維持する、熟成させていけたら嬉しい」と語った。帽子屋と言っても個人商店なので、お客さんのニーズに合わせてたりアレンジしたりする。そのすべては沼尻さんにとってブレイクスルーであり、新しいワクワクにもなっていく。

沼尻さんの家の近隣にも大きなホテルが建てられる計画があるそうだ。そんなのは今までなかったことで、ヒラフからはみ出た開発はどんどんニセコにも入ってくる。「この先の10年ってやっぱりおそろくもつと変わっちゃう」と沼尻さんは語った。今のままのニセコを守りたいが、経済の発展も必要なことで、ニセコの未来をニセコで生まれ育ちの町民たちに任せたいほうがいい、と沼尻さんは考えている。



沼尻さん

『ニセコの12ヶ月』
ルピシアによって
出版され、日本語版も
英語版も共にある、沼
尻さんが著者かつ編
集者を担当したニセ
コに対する愛情を込
めた一冊。
時系列でニセコで
の6年間の生活の心
得をエッセイにした
一編。巡りゆく季節の
中で、自然と歩調を合
わせている日々。田舎
暮らしや北海道への
憧れを惹き起す一巻。

帽子職人

一番おもしろそうだから帽子屋。そして、ニセコにはそもそも帽子屋がなかった、それで誰の迷惑にもかからないので、帽子屋をやり始め、帽子職人と名乗った。

ニセコに来る前に、「ギガヘッズ」（「大きな頭」の意味）というブランドを持っていった。それを諦めて、マッドハッター（『不思議の国のアリス』に出てくる帽子屋さん）に変更した。「マッドハッターなんてすごい有名な名前だから、その商標を取れるはずがないと思って、調べたんです。なぜか空いているんですよ。えっと思つて、試しに出したら、僕は商標を取れちゃったんです、マッドハッター」と沼尻さんは語った。まさしく運命の出会いだった。

帽子を作るのは東京時代から始まった。「自分の頭が大きいから作り始めた」ということはきっかけ。世の中に同様な悩みで困っている人もいるじゃないかなあと、思い、大きいサイズの帽子を売り出してみた。中古ミシンを買って、縫い始めてから、すでに15年間を経ている。

現在物価高騰の状況下、帽子の値段について、「僕の値段が上がるのはもうちょっとと先かもしれない、コロナ禍というクライシスに対して」と語った。安からず高からず、消費者にとって妥当な値段を設定する初心は今でも変わっていないのだ。



名刺「ザ・マッドハッター・ニセコ」